真宗大谷派名古屋教区教化センター Center Journal

2024.12.25
No.118

センタージャーナル

■発行人／安田 雅
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目８番55号
TEL（052）323-3686
FAX（052）332-0900

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

ともに語り合い、教化センター新構想を進めていく（７面に関連記事）

もくじ

・ご報告
教化センター主幹退任 ❷・❸
・公開講座
「平和展特別学習会」抄録 ❹・❺
・仏教図書館
グリーフケア関係書籍紹介 ❻
・教化センター新構想
・研究生第15期生募集 ❼
・INFORMATION ❽

教区教化のセンター

本年七月三十一日付で荒山淳氏が任期満了により主幹職を退任されました。荒山前主幹には主幹事務取扱の期間を含めて六期十八年という長きにわたり、教区教化の推進とセンター業務の遂行にご尽力をいただきました。

殊にセンター研究生制度の実践においては、第二期より現在の第十四期研究生まで総勢六十五名の新進気鋭の僧俗の指導に当たられ、その修了者は現在の教区教化事業の中核を担う人をはじめ、各組の教化、別院教化に携わる人、本山同朋会館嘱託補導や大谷派宗門関係の職員として勤務する人など、それぞれが教化の現場で活躍されています。刻々と移り行く現代社会の課題をいただきながら、どこまでも聖教と真摯に向き合い続ける姿勢の中で実践されてきたといえます。

そのことを思うとき、センター設立の願いである「人材の養成」の具現化に粉骨砕身の尽力をいただいた荒山前主幹の功労に対し、改めて深甚の謝意と敬意を表するところであります。

さて、詳細は本紙七頁に掲載してあるとおり、現在、「〝教区教化のセンター〟検討会議」を立ち上げ、あるべき教化センターのすがたとその具体化に向けての歩みを進めています。二〇二〇年度から出発した「尾張の教化体制」においては、教化センターの役割は、新たな体制で教化事業を進める中で定めていくべきとの方向性から、いわば積み残しの課題として現在に至っています。

検討作業の中では、「教区教化のセンター」という概ね一致したキーワードが確認されるものの、その実際の「かたち」はどうあるべきか。二万点を超える蔵書、三千点に迫る教化教材は申すまでもなく名古屋教区の財産であります。

センターに行けば教化の情報を受け取ることができる。そして教区内の方々や課題を持ちうる方々の出会いと語り合いの「場」であること、つまり、時と場と課題を共有できる教化センターであるという設立の願いを受け止めつつ、「時代社会の要請に応える総合教化活動」の推進に資する教化センターとしての具体的役割を明確にしてまいりたいと思います。

皆様のご意見をお待ちしております。

（主幹事務管掌　安田　雅）

ご報告

教化センター主幹退任

荒山　淳　氏

任期満了に伴い二〇二四年七月三十一日付で荒山淳氏が主幹を退任した。主幹事務取扱の三年間を含め六期十八年の任期を全うした。なお、後任は教化センターの機構再編を経る中で任命される予定。

退任御挨拶

「慶ばしいかな」。宗祖は『教行信証』を撰述されるなか、二十数回にわたって遇い難くして本願念仏、三国七祖の教法に値遇した「慶」びを見出しておられる。二〇二三年の春に真宗本廟で宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が厳修され、数年後間もなく名古屋教区・別院でも法要が執り行われようとしている。慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」を縁に、この身がこの世に生まれ出た意味を考え、あらためて慶ばしき「いのち」を憶念するとき、『大無量寿経』の第十五願「眷属長寿の願」にたずねることが出来るのではなかろうか。

設い我、仏を得んに、国の中の人天、寿命能く限量無けん。其の本願、修短自在ならんをば除く。若し爾らずは、正覚を取らじ。

（『真宗聖典』第二版一八頁）

浄土を生きようとする人々の寿命は限りないものであるが、長短を自在にできるという。人は他者との関わりの中に「いのち」を生きており、そのいのちの長短が自在であるのは、他者との関係が真実の慶びであれば限りなく持てばよいし、真実の関わりでないならば、関わりが中断されるのも大切な方便だということであろう。人間が信心の智慧のないまま他者と関わるときは、顚倒に堕するものであると師仏から照破されてみれば、ただ関係することの延長だけを願うのではなく、関係を破して転ぜられることを願わなければならぬ。他者との関係に浄土の本願が展開されれば、自他共に浄土眷属のいのちが育てられていくのである。

限りなく呼応の関係を展開し続けるために、一瞬たりとも停滞することなく本願聞思の歩みを続けていく。「聞思して遅慮すること莫かれ」（『真宗聖典』第二版一六〇頁）。宗祖の賜りし無上の慶びに随順し、十八年間の教区教化センター主幹の任を退くこととする。教区関係各位の皆様には多大な御支援と恩恕の中勤められたことをここに謝す。　荒山　淳拝

荒山前主幹が出演した動画をYouTubeにアップしています

経典に学ぶということ

～研究生学習会「観経序分に学ぶ」講義抄録～

講師：荒山　淳　主幹（当時）

荒山淳前主幹が担当した第十四期研究生学習会から、経典に学ぶということについての講義抄録を掲載する。

経典を読むことの意味

研究生学習会では『観無量寿経』の「序分」を紐解き学んでいきます。それは「王舎城の悲劇」という過去の歴史的事件をただ知ってほしいからではありません。善導大師は『観経』の「序分」を六つの縁に分けて註釈されますが、それは「父王が監禁された」「イダイケ夫人がアジャセ王に背いたばかりに王宮に閉じ込められた」など、事柄だけに注目して単純に分けたのではない。私たちは何か事件が起きれば「起きてほしくないことが起きて困った」と文句を言うだけですが、善導大師は「禁父縁」「禁母縁」など、「縁」をもって押さえておられる。つまり、それらは仏法に出あうための縁、仏法に無自覚な私たちに自覚を誕生させる縁だということでしょう。そういった所に「観経序分〝を〟学ぶ」ではなく「観経序分〝に〟学ぶ」ということの意味があるのです。

例えば「散善顕行縁」ですね。お釈迦様は救われたいと願うイダイケ夫人に「讃誦大乗」（『真宗聖典』第二版一〇二頁）と、大乗経典を読むことを勧められます。経典は自らの姿を映す鏡なんだと、そのことをお釈迦様はイダイケに伝えたかったのでしょう。善導大師は『観経疏』「序分義」において、経典を読むことの意味を次のようにおっしゃいます。

「読誦大乗」といふは、これ経教はこれを喩ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ぬれば、智慧を開発す。

（『浄土真宗聖典　七祖篇』三八七頁・本願寺出版社）

ですから、仏教の学びというのは、仏教用語を覚えて賢くなるという話ではないし、「あぁ、ええ話が聞けてよかったなぁ」と感心することでもないわけです。経典に映し出される自身の姿、我が身を知って、自覚的に仏道を歩むことが願われているということなのです。

人生の「たて糸」と「よこ糸」

善導大師の『観経疏』に尋ねてみますと、「経」とは一体どのようなものなのか、きちんと教えてくださっていますね。これは『観経疏』の「玄義分」に示されている一文です。

「経」といふは経なり。経よく緯を持ちて疋丈を成ずることを得て、その丈用あり。

（『浄土真宗聖典　七祖篇』三〇四頁・本願寺出版社）

「経」は「たて糸」。「緯」は「よこ糸」。それによって「疋丈」つまり「織物」が作られているということです。私たちの人生という織物は、たて糸とよこ糸で織りなされる。その際、経典は、人生を貫くたて糸だと。

この「経」という漢字の、元々の象形文字を見ますと、これは人が椅子に座って、機織り機のところで機を織っている姿なんですね。

左側の糸偏ですが、これは糸を紡ぐ。糸は細いものを撚ってねじり合わせて作られます。そういった姿がこの糸偏の一つの意味です。そしてもう一つは、椅子に腰掛けている様子だとも言われる。では、どこに腰掛けているかと言えば、右側のつくりの部分、これが機織り機です。機を織る時に不可欠なこととして、たて糸をピンピンに張る必要があります。ですから、このような象形文字の様子において、たて糸が象徴的なものとされ「経」という字が形作られていったのでしょう。

このようにピンと張られたたて糸に、私たちは人生のよこ糸を織りなしていくわけです。「今日も一日、無事にすんだなぁ」と言ってよこ糸を一本入れる。今日は皆と共に学ぶことができた。サンガの一員として、仏法に出あうことができた。その喜びをもって、よこ糸を一本入れていく。そうこうしているうちに、自分の大事な友達が病気で亡くなったりする。なんと哀しいことかと言い、また一本、すっとよこ糸が入る。私たちの人生は、こうやって日々、一本一本とよこ糸が入っていくわけです。そうして何十年と生きてきた中でたくさんのよこ糸が入って、ぽちぽちと人生の錦は完成し、「わたくしの人生はこうでした」と言って高くかかげ、皆さんに見ていただくこともできます。しかし、もしたて糸が無かったならばどうなるでしょうか。

たて糸（＝経）がよこ糸（＝緯）をたもっているからこそ、織物（＝疋丈）が出来上がるのです。織物には様々な柄や模様がありますが、これはよこ糸が表に出ていて、そうして形作られたものなんです。一方で、たて糸というのは一切表に出ない、隠れて見えない糸なんです。何故かと言えば、たもつ糸だからです。だから、たて糸が無ければ柄や模様どころか、織物そのものが成り立ちません。出来上がったと言って高くかかげた途端に、バラバラと崩れ落ちてしまうことになります。

空しく過ぐる

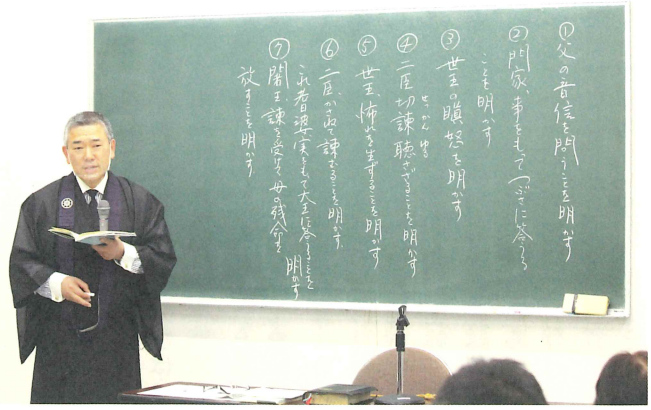
経典という、一生を貫くたて糸が無ければ、人生の錦はどういうことになるでしょうか。「この経教に出あうことが無かったならば、私の人生は崩壊して終わる」ということがあるのです。

天親菩薩は『浄土論』において、

仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者無し。

（『真宗聖典』／第二版一四七頁）

と言われています。たて糸の無い人生というのはまさに「空しく過ぐる」人生であるということでしょう。「空過」の反対は「成就」、「完成」ということです。成就された人生となるのか、未完成の人生として終わるのか。中国の『孟子』という書物に「鰥寡孤独」という言葉が出てきます。「鰥」というのは、妻を失った夫のこと。そして「寡」というのは夫を失った妻。結婚生活を送ってきたならば、必ずこういうことが訪れます。そして「孤」というのは孤児、つまり親がいない子どもです。「独」というのは、子どものいない親。これらの人のように、ひとりぼっちで、よるべの無い人々を総じて「鰥寡孤独」と表現しています。しかし、これは決して他人事ではありませんわね。「家族のために汗を流してきたけれども、気が付いたら誰もおれません。一体、何のための人生だったのか」と、ボソッと語られる方がおられます。空しく過ぎることの無い人、そんな人は一人もいないと思います。



孤独の事実が我が身を襲う時、何を生きる力として、支えとして生きていったらよいのか。お金か、友達か、家族か。「鰥寡孤独」というのは、そのような私たちのよるべを問う言葉でしょう。そういう時にお釈迦様はイダイケ夫人に「読誦大乗」と、経典を読むことの重要性を説かれる。鏡の如き経教に学び、我が身を知り、自覚的な道を歩む。ひとりぼっちになったとしても、愚痴る必要は無い。ひとりならひとりで生きていくことのできる道がある。「二河白道」でいわれる道幅の広さがまさにそうですね。「闊さ四五寸許り」（『真宗聖典』第二版二四七頁）とは、ひとり歩む道だということでしょう。人間は二人いるともたれかかるということがあります。仏法聴聞というのは、必ずひとりで行く自覚の道ということを肝に銘じておかなければならないと思います。仏は本当のよるべと、帰すべき所を示してくださっているのです。

聖教に学ぶことの背景にある、このような仏の願い、そして先学たちの経典に尋ねる歩みの姿勢を大事にし、学び続けていきたいのです。

（二〇二三年四月十一日講義）

公開講座
2024年3月22日

「平和展」特別学習会　抄録

大谷派の大陸開教とチベット仏教

石濱　裕美子氏
（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

日本の諸宗派の中でもっとも早くチベット仏教（喇嘛教）と接触したのは大谷派の僧小栗栖香頂（一八三一―一九〇五）であった。大谷派とチベット仏教との関係はその後も続くものの、青木文教、多田等観などの本願寺派の僧がはなばなしくチベット入りし、現在も盛んに研究されていることに比し、大谷派僧の事績は等閑に付されてきた。そこで以下、明治期の大谷派とチベット仏教の交流史について述べてみよう。

●明治期の大谷派と九州人脈

勤王僧を輩出し、時流にいち早くのった本願寺派と異なり、北陸・中部地方に信徒の多かった大谷派は幕府側を支持していたため、明治維新後はマイナスからのスタートとなった。そのため、大谷派は明治政府に忠誠を示すべく北海道開拓・「支那（当時は清朝）」・朝鮮政策に積極的に参加し、どの宗派よりも早く大陸開教に着手した。この時キーパーソンとなったのが大分県戸次の妙正寺の学僧、小栗栖香頂と彼の影響下からでて明治の大谷派の宗政を牛耳った石川舜台（一八四二―一九三一）と、その二人の後援を受けた「法主」大谷光瑩（一八五二―一九二三）の三人である。

小栗栖香頂は広瀬淡窓が主催する全国的に著名な儒学塾、咸宜園において学び、「宜園の三才」の一人に数えられる秀才であった。実は、幕末維新期の真宗僧の中には、咸宜園出身者やその系譜に連なる者が多く、彼らを庇護した政界の要人も肥前（佐賀）や薩摩（鹿児島）などの九州勢であった。たとえば、一八七二（明治五）年に真宗が宗派をあげて宗名恢復運動を行った際には、小栗栖たちは旧佐賀藩士参議**大隈重信**（一八三八―一九二二）を頼り、同年、「法嗣」大谷光瑩、松本白華（大坂で広瀬淡窓の弟の下で学んでいる）、石川舜台、成島柳北、関信三が欧州視察を行った際には、旧佐賀藩士司法卿**江藤新平**（一八三四―一八七四）の支援を受けた。このため、江藤が佐賀の乱で失脚し**大久保利通**（一八三〇―一八七八）が暗殺に倒れると、石川舜台の第一次宗政期も終わった。お気づきかと思うが、小栗栖たちを庇護した政治家三人は全員大陸を身近にかんじる九州出身である。

●石川舜台第一次宗政期と小栗栖香頂の大陸布教の始まり

小栗栖香頂が大陸布教の唱道者となった経緯とその目的について述べよう。一八六九（明治二）年、京都府が真宗に一向宗の名を宣下すると、真宗五派はこの屈辱的な宗名を覆すべく枳穀邸に会合して対策を協議し、この時小栗栖は二人の座長のうちの一人であった。一八七二（明治五）年二月、小栗栖は上京し二十一歳の「法嗣」、大谷光瑩の教育係につき、参議大隈重信らを説いて、「真宗」名の公認をとりつけた。同年三月、石川舜台は寺務所の改正係へ就任し教団機構を整備する数々の施策をうちだした。これら施策の多くは小栗栖がその前に大谷光瑩に献策していたものと重複していることから実質小栗栖の献策といえよう。

これら小栗栖の献策の一つに国内（薩摩、琉球、隠岐）・国外（中国、朝鮮）への開教がある。有言実行の小栗栖は翌一八七三（明治六）年七月、長崎から清国にわたった。小栗栖が最初期に大陸にわたった背景には、彼が大陸を肌感覚に近く感じる九州出身者であり、長崎を通じて世界情勢に通じていたことと無縁ではないだろう。大陸にわたった小栗栖は清国皇室の仏教がチベット仏教であることを知ると翌一八七四（明治七）年、北京のチベット仏教センター雍和宮を訪問し、そこの長トンコル・フトクトと知己を結んだ。当時、清の皇室の宗教はチベット仏教であり、チベット・モンゴル・「満州地域」の僧院もみなチベット系であった。

一八七六（明治九／光緒元年）年八月、小栗栖香頂は漢人への布教を念頭に、漢語の口語で法話が出来る日本人僧を養成するため、上海のイギリス租界に東本願寺上海別院を開設した。同年、小栗栖香頂は『喇嘛教（チベット仏教）沿革』を発表しチベット仏教をはじめて日本に紹介した。石川舜台は本書の序において、「真宗の宗徒がチベット仏教の僧を教化すれば、仏教はチベット仏教圏であるシベリヤからチベットをとおってインドに流布し還源する」という小栗栖の本を要約した壮大な構想を記している。同年一一月、親鸞に見真大師号が宣下されるが、これは石川によると、清国開教を評価された結果であるという。一八七八（明治十一）年に石川舜台が失脚し、渥美契縁がかわって寺務所長に就任すると、大谷派の清国布教は縮小した。

●世界仏教ブームを背景とした石川第二次宗政期（一八九七―一九〇二）

明治も後半になると、漢学で育った小栗栖香頂世代が後退し、イギリスでサンスクリット学を修めた**南条文雄**（一八四九―一九二七）や、**清沢満之**（一八六三―一九〇三）、**井上円了**（一八五八―一九一九）など近代教育を受けた世代が台頭した。石川舜台は一八九七（明治三十）年二月に彼ら若手の支持を得て宗政に復帰し、再び海外にむけた事業を展開する。まずは同時代の世界情勢から簡単に述べよう。

欧米列強がアジア各国を軍事力・経済力で制圧した十九世紀、社会には「弱肉強食」、「優秀な白人が未開の有色人種を支配していく」という差別的な人種論が横行していた。一方、これに対する反作用として、世界中の多様な現象の中に共通の根源、言い換えれば普遍性をみいだそうとする普遍主義も流行した。この普遍主義の中でも知識人に広く影響を与えたのが神智学協会（Theosophical society）の思想であった。

神智学協会は一八七五（明治八）年にヘレナ・ブラヴァツキーとオルコット大

佐によって「人種、宗教をこえた普遍的な宗教の創造」を目指してニューヨークに設立された。一八七八（明治十一）年、オルコットとブラヴァツキーはインドに拠点を移し、仏教へと傾倒した。ただしこの場合の「仏教」とはアジアの各地で実践されていた伝統仏教ではなく、歴史上のブッダが語った言葉の中から、四民平等や克己、科学との親和性といった近代精神にマッチする要素を欧米人が抽出して作成した「新仏教」であった。

欧米人が仏教を高く評価したことは、アジアの人々に「物質文明では欧米が優れていても、精神文明はアジアの方が優れている」という自信を与え、仏陀が覚りを開いたブッダガヤの遺跡を仏教徒の手に取り戻すための大菩提会（Mahabodhi Society）が結成された。そしてこのような世界規模の仏教ブームの中で仏教界の中心とみなされていたのがチベットのダライ・ラマであった。

石川舜台が宗政に復帰した翌一八九八（明治三十一）年八月二十三日、「法嗣」大谷光演（大谷光瑩の次男）は本山の許可を得ずに上京し、浅草別院を座所とした。石川は近代的な仏教学を修めた南条文雄・村上専精（一八五一―一九二九）などを「法嗣」の教育係（侍読）とし（九九年には清沢満之が補導係についた）、「法嗣」の東京への脱出劇を「御壮図」と称えた。この後慧日院（厳如九男）と能乗院は上海、台湾、後には「満州」・華北を視察し、教学部長兼開教事務部長の谷了然は上海別院のてこ入れをし、杭州と蘇州に布教所・学校を設置し、北方蒙（北方心泉）も南京に布教所・学校を設置した。そして、同九八年、寺本婉雅（一八七二―一九四〇）と能海寛（一八六八―一九〇三）がチベットの都ラサを目指して大陸にわたった。これらより、石川の宗政復帰によって海外開教が再開されたことがよくわかる。しかし、当時東本願寺は膨大な借財に苦しんでおり、一九〇二（明治三十五）年に財政破綻すると石川舜台も失脚した。

左から寺本婉雅、ダライ・ラマ13世、小栗栖香頂

●壮士的大谷僧の台頭

一八九五（明治二十八）年、ロシアが主導した三国干渉により日本の対ロシア感情は悪化し、一九〇〇（明治三十三）年の北清事変を口実にロシア軍が南下し「満州平野」に常駐すると、ロシアとの開戦やむなしとの世論が急速にひろがり、一九〇四（明治三十七）年二月についにロシアとの間に戦端が開かれた（日露戦争）。この時期、仏教界においてもナショナリズムが高揚し、壮士（大陸浪人）的な僧侶が台頭し、本職の軍人が真宗の布教使に偽装して活動するなど、仏教の教理からは遠く外れた軍事的・政治的な僧侶の行動が目立つようになった。以下、壮士的大谷僧について述べよう。

一八九八（明治三十一）年に両連枝が大陸を視察した際にも大陸浪人が同行しており、厦門布教所の設立者である高松誓にいたっては一九〇〇年に北清事変が勃発すると台湾総督の指令で自ら布教所に放火し、邦人保護を口実に日本軍が厦門に上陸する手助けをした。

一八九八（明治三十一）年からチベット入りを狙っていた寺本婉雅の人間関係もきな臭い。まず東京で参謀本部、外務大臣と接触し、北清事変の鎮圧にあたった福島安正率いる第五師団に通訳として随伴し北京へいき、事変後に清朝の皇族や雍和宮の高僧と親交を深めた。寺本はこの時、チベット語の北京版大蔵経を日本にもたらすことに成功し、一九〇一（明治三十四）年に雍和宮の貫首アキャ＝ホトクトを来日させた。

石川舜台の第二次宗政期は一九〇二（明治三十五）年に終わっていたため、寺本は本山の支援を得ることはできず自力で一九〇五（明治三十八）年五月にラサ入りに成功した。帰国するとその経験を買われ、参謀本部や大隈重信の後ろ盾を得て、翌一九〇六（明治三十九）年、イギリス軍を避けて青海に滞在中のダライ・ラマ十三世を親ロシアから親日本にかえるための工作員として、ダライ・ラマの下に派遣されることになった。寺本は大隈重信や外務省にダライ・ラマ周辺の情報を送り続け、ついに一九〇八（明治四十一）年八月四日、山西省五台山での大谷尊由（大谷光瑞の弟）とダライ・ラマ十三世との会見を実現させ、この席で日本とチベット両国から留学生の交換を行うことが決定した。

この結果として多田等観、青木文教らの本願寺派僧のチベット入りが実現したのである。この会見は寺本がアレンジしたにもかかわらず、なぜ本願寺派の「法主」代理が会見相手となり、留学僧は本願寺派僧になったのであろうか。考えられるのは、石川舜台が失脚した後の、財政難にあえぐ東本願寺には石川のひいた大陸開教路線を続行する余裕がなかったからと思われる。しかし、大谷派の僧侶がどの宗派よりも早くチベット仏教世界と接触し、また、本願寺派の僧侶がチベットに滞在したことには変わりないため、結果、真宗僧はチベット通として日本が「満州」・モンゴルに進出した際に土地の宗教政策に深く関与していくこととなったのである。

主要参考文献

中西直樹（二〇一六）『明治前期の大谷派教団』法藏館

法雲山妙正寺編（二〇〇四）『小栗栖香頂師百回忌法要記念 教法のため人びとのため―小栗栖香頂師の事蹟―』

白須浄真（二〇〇七）「一九〇八（明治四一）年の清国五台山における一会談とその波紋 外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊」（『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 文化教育開発関連領域』56：55―64）

講演の模様をYouTubeにアップしています

仏教図書館

グリーフケア関係書籍紹介

グリーフケアについて知りたい、学びたい方へ

教化センターでは、「現代社会と真宗教化」の研究課題として「グリーフケア」に取り組んでいる。その研究学習のために、当センターには、グリーフケアとは何かという基礎的なことから、社会の現場における取り組み、学術的研究の歴史などがまとめられた書籍が収蔵されている。貸し出しをしているので、ぜひ、手に取って学びを深めていただければと思う。

◆グリーフケアについて基礎的なことを知る

『ともに悲嘆を生きる　グリーフケアの歴史と文化』島薗　進　朝日新聞出版（2019）
悲嘆をどのように考えるのかという歩みを歴史的にたどりながら、今グリーフケアが求められている理由を尋ねていく内容。その中で、宗教の役割、葬送に関わる仏教儀礼の持つはたらきという視点からもグリーフケアの方向性について論じられている。

『死別の悲しみに向き合う　グリーフケアとは何か』坂口　幸弘　講談社（2012）
死別という体験に自分が出会ったとき、どのように向き合えばよいのか。身近な人が死別を経験したとき、どのようにその人の力になれるのか。最新の研究を踏まえながら、筆者がこれまで関わってきた死別体験者を支援する活動の中で出会ってきた方々の声を通して、グリーフケアの課題と方向についてまとめられている。

◆研究と実践からグリーフケアを学ぶ

増補版『悲嘆学入門　死別の悲しみを学ぶ』坂口　幸弘　昭和堂（2022）
「喪失と悲嘆を深く理解し、望ましい遺族へのケアのあり方を社会全体として考える」ために、「悲嘆学」という名のもとに、その基本的知識や視座が共有できるように構成された学習テキストである。悲嘆についてのこれまでの研究と実践からグリーフケアを学ぶことができる。

『グリーフケア入門　悲嘆のさなかにある人を支える』高木　慶子（編著）勁草書房（2012）
上智大学グリーフケア研究所の研究活動をもとに、グリーフケアの理論と実践をまとめたものである。実践編としては、災害時のグリーフケア、仏教儀礼と僧侶の役割におけるグリーフケアについて、また、理論編としては、スピリチュアルケア、臨床心理学における悲嘆、グリーフケア研究の動向について論じられている。

◆悲しみの声を聞く

『なくしたものとつながる生き方』尾角　光美　サンマーク出版（2014）
大切な人を亡くした方のサポート、またそのサポートをする人々を支援する一般社団法人リヴオンという団体を立ち上げられた尾角光美さん自身の喪失とグリーフを生きてきた歩みが綴られている。「大切な人やものを失ってもそこから生まれてくるものがある」。そして「悲しみから希望を」という願いをもとに、グリーフケアの活動にまでなった「つながり」が丁寧に伝えられている。

『悲しみを生きる力に』入江　杏　岩波書店（2013）
犯罪被害者遺族となって抱えた悲しみは、とても深い。本書には家族を奪われる形で失い、事件の真相も不明なまま、世間の目や報道のあり方などにも苦しみを抱えた体験とともに、「人は悲しみを生きる力に変えていける」という動きにまでつながる歩みから、大切な課題が問われている。

図書整理

実施期間　2025年１月27日(月)～２月14日(金)
＊期間中は図書・視聴覚教材の貸出は行いません。館内での閲覧や机のご利用もお控えいただきます。機材の貸出、長尺印刷は通常通り受け付けます。
＊借り受け中の書籍・視聴覚教材は2025年１月24日(金)までにご返却ください。

教化センターでは真宗や仏教に関する書籍を中心に、約25,000点の図書・視聴覚教材を収蔵しています。蔵書検索▶

改めて考える〝教区教化のセンター〟

教化センターについて、ご意見をお聞かせください。

その源流は1975年

名古屋教区教化センターのスタートは1990年４月。その開設には種々様々な意見が出され、教区をあげて話し合いが交わされたことは想像に難くありません。その30年の歴史を振り返る冊子『真宗大谷派名古屋教区教化センター 30年の歩み』を見ると、教化センター設立の源流は1975年とあります。少なくとも約50年前より、名古屋教区では〝教化のセンター〟が望まれていたわけです。当時の『名古屋御坊』などでも「教化センターができるんだ」ということが、喜びをもって書かれている記事が見られます。

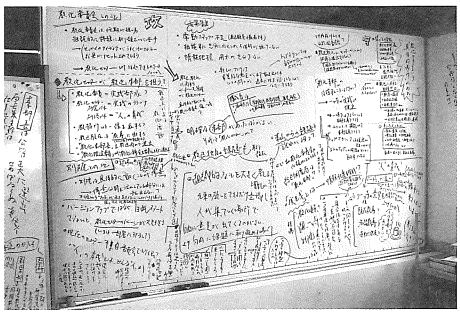
『30年の歩み』によれば、最初に教化センターと称されたのは、かつて名古屋別院境内に存在した旧教務所役宅（木造平屋）と想像され、そこで様々な研修が開かれていたといいます。1970年代に構想された教化センターは「人材養成を目的とする研修センター」、1990年に実際に開設された教化センターは「図書館としても利用できる総合教化機能を有した研修センター」と表現されています。開設後にも、色々な事業形態が試みられ、教区教化委員会や別院と連携していく為の役割分担として、教化センターは「人材育成や資料の収集・提供」を担う、とされてきました。そして、2020年に示された現在の教化体制では「課題の提供と人の育成」が教化センターの果たすべきことと確認されています。

つねに問われる「センターとは」

名古屋教区において望まれた〝教化のセンター〟は時代の移り変わりに応じ、その具体的あり方が模索され続けてきたといえます。そして、今も教化センターとは何かということが問われています。具体的には、「教化センターは図書館、研究課題に専念して、教化活動の〝下支え〟をしたらいいんじゃないの？」「やっぱり〝人〟の育成は外せないんじゃない？」「教化のセンターというんだから、別院と教化委員会と一般寺院を連携させて、リーダーシップをとるのが役割でしょ？」「教区独自の課題を見出し、教区をあげて取り組むことがあってもいいよね」「現在の教化委員会の総合調整局は、そもそも教化センターが担うことじゃないの？」などの声が寄せられます。現在の教化体制を構築した検討委員会でも、教化センターについては、審議の余地を残した〝積み残し〟課題とも認識され、検討委員会解散後も教化センター内にて事業形態などの模索を続けています。

教化センターについて、語り合いましょう

教化センター内に大きなホワイトボードがあります。今、そのホワイトボードを使って〝教区教化のセンター〟とは何かを話し合っています。名古屋教区にとって、教化委員会、別院、組、一ヶ寺、一人にとって、どういう形がよいのか。その願われる形を探る検討会議です。教化事業に関わる方々から、より多くの意見を聞きたいと思っています。検討の過程が残されるホワイトボードを見ながら語り合いませんか。教化センターは平日の10時に開館します（臨時閉館日あり）。ぜひお越しいただき、ご意見をお寄せください。



研究生第15期生 募集

教化センターは2001年より20年以上にわたり研究生制度を展開してきました。そしてこの度新たに研究生第15期生を募集します。教区内の大谷派寺院に所属する満20歳以上の方であれば、僧籍をお持ちの方に限らずどなたでもご応募いただけます。カリキュラムはお聖教に関する学習会や現地研修、当センターの事業に触れる研修等です。修了後は当センターや教区教化委員会のスタッフとして推薦させていただくことがあります。現在、2025年の２月頃から募集を開始する予定で準備を進めています。皆様からのお問い合わせ、ご応募をお待ちしております。

第14期 研究生報恩講

研究生 募集要項

【対　　象】満20歳以上の、名古屋教区内の大谷派寺院・教会に所属する者
（年齢の上限はありません。僧籍・大谷派教師資格の有無は問いません）
【募集人数】10名程度
【任　　期】2025年７月～2028年６月（３年間）
【学 習 会】月に２回程度
（主に午後４時30分～８時30分頃）
【受　　付】2025年２月～（仮）
※入学金、授業料なし。
現地学習会費用、テキスト代は自己負担。

現時点で応募を検討されている方は、当センターまでお問い合わせください。

研究業務報告（2024年６月～11月）

①大谷派の近現代史

- 「あいち・平和のための戦争展」に出展同実行委員会主催（８月15日～８月18日）
- 平和展学習会　実施
（６月３日・７月１日・８月８日・８月30日・９月19日・９月27日・10月８日・10月24日・11月20日）

②尾張の真宗史

- 教区内外の真宗大谷派寺院所蔵法宝物の調査

★調査の報告を次号にて掲載予定

③現代社会と真宗教化

- 第１回「グリーフケア学習会」（映画上映会）を開催
映画「グリーフケアの時代に～あなたはひとりじゃない～」
10月30日　教務所１階　議事堂
56名参加　※上映したDVDの貸出しできます

「グリーフケアの時代に」（2023年/78分）
構成・編集・監督：中村裕

★６面にてグリーフケアに関する蔵書を紹介

- 当センター関係者による「是旃陀羅」問題学習テキストの輪読会　実施
（７月31日・８月28日・９月26日・10月17日・11月20日）

④真宗の仏事（主にご本尊・お内仏について）

- 「真宗の仏事 研究・学習班」学習会　実施
（９月11日・10月16日・11月25日）

研修業務報告（2024年６月～11月）

①聖典研修「『正信偈』を読む」開講

講　師：梶原　敬一 氏（姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶）
第一回　10月11日　38名聴講
＊全５回／教務所１階　議事堂

②研究生学習会

- 「お勤めと教えの意味を『聖典』に尋ねる～私の悩みを大切に～」
講　師：池田　真 氏（第13組　萬瑞寺住職）
７月25日・９月20日・１月22日（最終）
- 「グリーフケア」
８月22日　講師：吉田　暁正 氏（業務嘱託［研究］）
10月25日　講師：服部あずさ 氏（臨床宗教師／第20組 法敬寺 坊守）

他教区教学研鑽機関との交流

- **第12回　各教区教学研鑽機関交流会（教学研究所主催）**
テーマ：「現代における教学の課題」
日　時：2024年５月22日～23日
会　場：しんらん交流館
当センターを含め14教区45機関と未設置の教区が対面とオンラインで参加した。初日は教区改編に関係する２教区の活動報告と、研修・研究等の事業に関する意見交換、２日目は「是旃陀羅問題」についての宮下晴輝教学研究所所長の講義のあと、質疑応答が行われた。
- **福井教区教学研究所来館**
日時：2024年６月６日
福井教区教学研究所から、職員５名と研究員など11名の計16名が当センターへ来館した。情報共有や、意見交換などの交流を行った。

宮下所長の講義

INFORMATION

◆聖典研修「『正信偈』を読む」

講師：梶原　敬一 氏
（姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶）
時間：午後６時～８時　会場：教務所１階　議事堂
期日：（全５回）
第２回　12月６日（金）、第３回　2025年１月24日（金）
第４回　３月14日（金）、第５回　５月16日（金）

Web配信
講義の録画動画を期間限定でYouTubeにて配信します（要申込）

◆公開講座「真宗のご本尊の歴史的変遷」

講　師：青木　馨 氏
（同朋大学仏教文化研究所客員所員、真宗大谷派蓮成寺（碧南市）住職）
日　時：2025年１月15日（水）午後３時～５時
会　場：教務所１階　議事堂
聴講料：500円

長年真宗史を研究してこられた青木馨先生より、ご本尊の歴史的変遷についてご講義いただき、ともにその〝すがた〟の意味を学びたいと思います。皆様どうぞご参加ください。

《雑感》 親鸞聖人は浄土の荘厳を「唯仏与仏の知見（ただ仏と仏のみが知ることができる境地）」といわれているが、ある知人から「凡夫には限定できない世界」という意味ではないかと聞いた。そう言われてみると、私は経典のきらびやかな浄土の描写を自身の願望や世間の常識・価値観に当てはめて受けとめているようにも思う。日々の生活において仏法を味わうことは大切だが、世間への迎合とは違うはずだ。世情に阿ることが苦しみの一因になり得ると示し、そこから解放された姿を表現するのが浄土の荘厳といえるのかもしれない。当センターの仏事の取り組みを通して引き続き考えていきたい。（た）

■教化センター

〈開館〉月～金　10:00～21:00
〈貸出〉書籍2週間　視聴覚1週間

教化センターSNS

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ
［お東ネット］https://www.ohigashi.net　お東ネット　検索
■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

◆第36回 平和展　2025年3月18日（火）～24日（月）

平和展は過去の侵略加担の事実を見つめ、私たちのあり方を、あらためて問うことを目的とした展示会です。第34・35回に引き続き「真宗大谷派の海外侵出－「満州開教」－」を取り上げます。今年度は特に「開拓団」に着目して、教務所１階議事堂にて展示を行います。また期間中に公開講座を開催する予定です。

「弥栄村」に開設された「弥栄東本願寺」